

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520345

研究課題名（和文） ムンダ語における感情語の研究とそのデータベースの構築

研究課題名（英文） Studies and construction of database on expressives in Mundari

研究代表者

長田 俊樹（OSADA TOSHIKI）

総合地球環境学研究所・研究部・教授

研究者番号：50260055

研究成果の概要：本研究はムンダ語における感情語について、ムンダ語の百科事典、エンサイクロペディア・ムンダリカ（EM）のなかにみられる感情語を抜き出し、データベース化することと感情語そのものの研究を目的とする。当初考えていたよりも時間がかかり、EMのデータをすべて打ち込むことができなかったが、感情語の研究という意味では新たな発見も多く、その結果は二編の論文としてまとめることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ムンダ語、感情語、データベース、南アジア諸語、エンサイクロペディア・ムンダリカ

1. 研究開始当初の背景

これまでに受けた科学研究費補助金の研究種目は以下の通り。

（1）基盤研究（C）（2）平成10年度 - 平成12年度 課題番号 10610527

研究課題名 ムンダ語語源辞書編纂のための基礎的研究

（2）基盤研究（C）（2）平成13年度 - 平成15年度 課題番号 13610677

研究課題名 ムンダ語語源辞書編纂のための

データベースの構築

これらの研究は、将来ムンダ語語源辞書を編纂するために、すでに出版されている辞書をデータベース化する計画で、(1)はホー語の辞書を、(2)はムンダ語の百科事典の電子化をめざしている。このうち、(1)については、すでに報告書を刊行している。また、(2)についても、報告書を出版するとともに、インターネット上で公開している。

これらデータベース化された辞書にも、感情語がふくまれており、その研究成果を十分に生かすことができると考えている。

準備状況：すでに、うえでのべたように、二度の基盤研究によって、ホー語（ムンダ語とはお互いに通じ合うほど近い）とムンダ語のデータベース化がすすんでいる。そのデータベースを利用することで、これまでの感情語研究ですでに明らかな部分とまだ不十分な部分を把握することができる。また、日本国内にすむ唯一のムンダ語ネイティブ・スピーカーから、豊富な感情語についての予備調査はすでにおえており、長田が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所でおこなった2001年夏期言語研修ムンダ語のテキストで、若干の感情語の記述を試みている。

2. 研究の目的

インド・ジャールカンド州を中心に分布するムンダ語には、感情語と呼ばれる単語がある。感情語とは、いわゆる擬態語や擬音語に類するもので、オノマトペと呼ぶ研究者もいる。しかし、単なる擬態語や擬音語ではなく、特別な形態論的統語論的特徴を持っている。インドにおいては、カルフォルニア大学教授のエメノーが感情語(Expressive)と命名して以来、感情語と呼ぶことが多い。この感情語

という命名は東南アジアに分布するオーストロアジア語族の研究者であるディフロース博士が最初に名付けたもので、その命名法をエメノーが採用した。ムンダ語はインドに分布するオーストロアジア語族に属する。したがって、長田も感情語と呼ぶことにする。

そのムンダ語における感情語の研究は従来おこなわれたことがなく、ムンダ語の百科事典である『エンサイクロペディア・ムンダリカ』においても、それほど厳密な記述がなされていない。そこで、この三年間で、ムンダ語の感情語データベースをつくり、感情語の構造をあきらかにするとともに、隣接言語における感情語との比較をおこなう。

すでに述べたように、ムンダ語の感情語研究は皆無である。したがって、それ自体で十分価値があると考えられる。一方、日本語研究においては、擬態語や擬音語、あるいはオノマトペの研究が盛んである。また、擬態語、擬音語、オノマトペは何も日本語だけにかぎった現象ではなく、インド諸言語においても、よく知られており、インド諸言語における感情語の研究は、少ないながらもすでに出版されたものもある。そこで、ムンダ語の感情語の研究によって、その比較研究が容易になるだけでなく、感情語に対する言語表現の類似性などもあきらかになると予想される。

また、前述のエメノーが提唱する「インド言語領域」では、もともと系統のことなるインド諸言語が長い接触になどによって、類似する言語特徴を持つことが知られており、この感情語もその特徴の一つだと考えられている。そこで、このムンダ語の研究によって、インドのほかの諸言語の感情語研究に、大きな影響を与えることは間違いない。

3. 研究の方法

まず、すでにデータベース化されたホー語やムンダ語のデータから、感情語をぬきだして、感情語だけのデータベースをつくる。これまでのホー語辞典やエンサイクロペディア・ムンダリカのデータは、同意語としてならべている感情語が多いのだが、日本在住のムンダ語ネイティブ・スピーカーによれば、同意語とみられているケースも、細かい区別がある。そこで、すでにあるデータベースから出発して、インフォーマントとの共同作業を通し、こまかい分析もくわえながら、なるべく網羅的な感情語データベース作りを初年度はめざした。

データベース作りをおこなう際に、注意したのは以下のような点である。まず、語形変化と意味の違いの相関関係に注目しながら、語形変化としては、(1) 完全重複形なのか、部分重複形なのか (2) 部分重複形の場合、母音交替なのか (3) それとも子音交替なのか、その三つの点に注目する。また、意味ごと、つまり雨の降り方といった、同じような意味分野での感情語の違いを観察する。

さらに、これまであまり注目されてこなかった統語形態論的視点、つまり動詞的にあらわれるのか、副詞的にあらわれるのか、あるいは動詞の位置に感情語があらわれるときには、動作主は主語で標示されるのか、目的語で標示されるのか、といった問題についての考察が必要である。こうした点をすべてあきらかにするには時間が必要である。そこで、初年度では、まず既存のデータベースから出発する。既存の辞書によれば、感情語の語形変化はたんなる異形態とみなしているケースが多いが、インフォーマントによると、それらはたんなる異形態ではなく、意味の相違をとまなうのが一般的だという。そこで、インフォーマントとともに、その語形変化によ

って、どんな意味の相違があるのか、調査を丁寧におこなうことに初年度は主眼をおいた。ただし、初年度は調査だけで、データベース構築は次年度以降からおこなうのではなく、確定したところから、データベースとして、コンピューターにうちこんでいただく予定であったが、国内唯一のインフォーマントの病気等で、データベース構築の方は大幅に遅れてしまった。

初年度に引き続き感情語のデータベース作りをおこなう予定を進めた。平成17年度からは、隣接するインド・アーリヤ語やドラヴィダ語との比較研究についても、文献を読んで、比較に必要な知識をえる。予備調査の段階では、ムンダ語の感情語の方がヒンディー語の感情語よりも語彙数も豊富であるとみられているが、実際に、データベースを比較することで、検証を行う予定であった。しかし、こちらも初年度の出遅れが大きく響き、隣接言語まで手を伸ばすことはできなかった。

最終年度は当初は感情語のデータベースの完成をめざした。また、データベースからわかることを、(1) 語形の分析、(2) 意味分析、(3) 形態統語分析にわけ、総合的な分析をおこない、論文にまとめた。そのときには、インド言語領域論の立場から、インド・アーリヤ語やドラヴィダ語との相違点、類似点にもふれる。また、日本語はじめ、世界中の言語に存する擬態語や擬音語との類型論的比較については、メルボルン大学のニコラス・エヴァンス博士から、助言をえながら、類型論的分析もくわえる予定であった。

以上が当初予定していた研究方法であるが、実際に行う点ではかなりの変更があったが、その詳細は研究成果で述べる。

4. 研究成果

本研究はムンダ語における感情語に

ついて、ムンダ語の百科事典であり辞書でもあるエンサイクロペディア・ムンダリカ（EM）のなかにみられる感情語を抜き出し、データベース化することと感情語そのものの研究を行うことが主な目的である。この研究の大部分はEMの記述に依存する点が多い、しかし、研究を続けるにつれて、ムンダ語における感情語の記載がEMでは十分でないことがわかってきた。たとえば、同一の感情語として並べられている単語のなかにも、微妙な差が見られたり、母音や子音の差によって意味の区別が想定されるのに、その区別がはっきり記述されてなかったり、記述に不備がみられる。

そこで、日本在住の唯一のムンダ語母語話者に依頼し、EMでのムンダ語例を打ち込んでいただきながら同時に、EMでの記述が彼女のムンダ語との相違点を明らかにしながら、彼女の村での実際の使用例を打ち込んでもらうことにした。そのため、当初の想定よりも時間がかかり、また、インフォーマントの病気などもあって、本研究の間にはEMのデータをすべて打ち込むことができなかった。したがって、エンサイクロペディア・ムンダリカの感情語のデータベース化という意味においては十分な成果をあげることができなかった。

しかし、感情語の研究という意味では新たな発見も多く、その結果は論文としてまとめることができた。とくに、母音の相違点と意味の連関を考察できたのはこれまで誰も気がつかなかった重要な成果である。この成果を基に、今後は基盤研究(B)「南アジア諸言語の類型論的研究—南アジア言語領域論の再検討」において南アジア諸言語における感情語との

比較研究を行いたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

- ① OSADA Toshiki “Expressives in Mundari”, Third Austroasiatic Linguistics International Conference, Deccan College, India. 28 November 2007.
- ② OSADA Toshiki “Reciprocals in Mundari”, Seminar of Linguistic Typology. Max Plank Institute, Nijmegen, Netherland. 20 April 2006

[図書] (計 4 件)

- ① 長田俊樹「ムンダ語の感情語」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』35-66頁。2009.
- ② ANDERSON G. D. S., OSADA T., HARRISON D. “Ho and the other Kherwarian Languages”, Gregory D. S. Anderson(ed) *The Munda languages* pp.195-255. Routledge. 2008
- ③ OSADA Toshiki “Mundari”, Gregory D. S. Anderson(ed) *The Munda languages*. pp.99-168. Routledge. 2008
- ④ OSADA Toshiki “Reciprocals in Mundari”, V. Nedjalkov(ed) *Reciprocal constructions*. pp. 1575-1590. John Benjamin. 2007.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ: <http://munda.chikyu.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長田 俊樹 (OSADA TOSHIKI)

総合地球環境学研究所・研究部・教授

研究者番号: 50260055